

「世界遺産熊野花の窟と比婆之山 ～比婆山学×出雲学×熊野学～」

2019・8・3(土) 13:30～15:00

広島県庄原市帝釈峡まほろばの里・時悠館

みえ熊野学運営委員長(熊野市文化財専門委員長)
三石学

1、日本書紀と古事記

- 現存最古の歴史書(712、720年編纂)
- 歴史、神話、伝説、歌謡、祭祀、信仰、芸能など
- 道教、仏教、儒教の影響
- 古事記は全体の1/3が神話。日本書紀は歴代天皇の事績の記述に重点が置かれる。
- 国の成り立ちを明確にし、自分たちのアイデンティティを確立し国の内外に知らしめるため日本書紀が編纂された。
- 白村江の戦い(663年)や壬申の乱(672年)などが影響。
- 古事記では天・地・異界の三層構造⇒高天原・葦原中国・黄泉国
古事記には北方系の垂直的神話と南方系の水平的神話がある
- 天孫降臨神話の前に出雲の国があったということが不都合だから日本書紀に出雲神話がほとんど語られていない
- 古事記のスサノオの物語に五穀の起源のエピソードがあるが、日本書紀ではアマテラスの孫のニニギが稲穂を持って降りてきた。

日本書紀と古事記の比較

	日本書紀	古事記
発起人	天武天皇	天武天皇
編纂者	舎人親王ほか渡来人も	稗田阿礼が誦習し、太安万侶が記す
成立年	養老4年(720)	和銅5年(712)
巻数	全30巻+系図1巻	全3巻
文体・文字	漢字・漢文体	漢字・変体漢文(倭文体)
原典資料	『帝記』『旧辞』ほか寺社縁起、中国、朝鮮の史書	『帝記(天皇家の歴史)』『旧辞(豪族の神話や伝承)』
編集方針	海外向け、編年体 後世にも読み継がれる正史 天地開闢から持統天皇(697)	国内向け、物語風、出雲神話、氏族の系譜、天皇中心の歴史書 天地初発から推古天皇(604)

2 紀伊半島と熊野の誕生

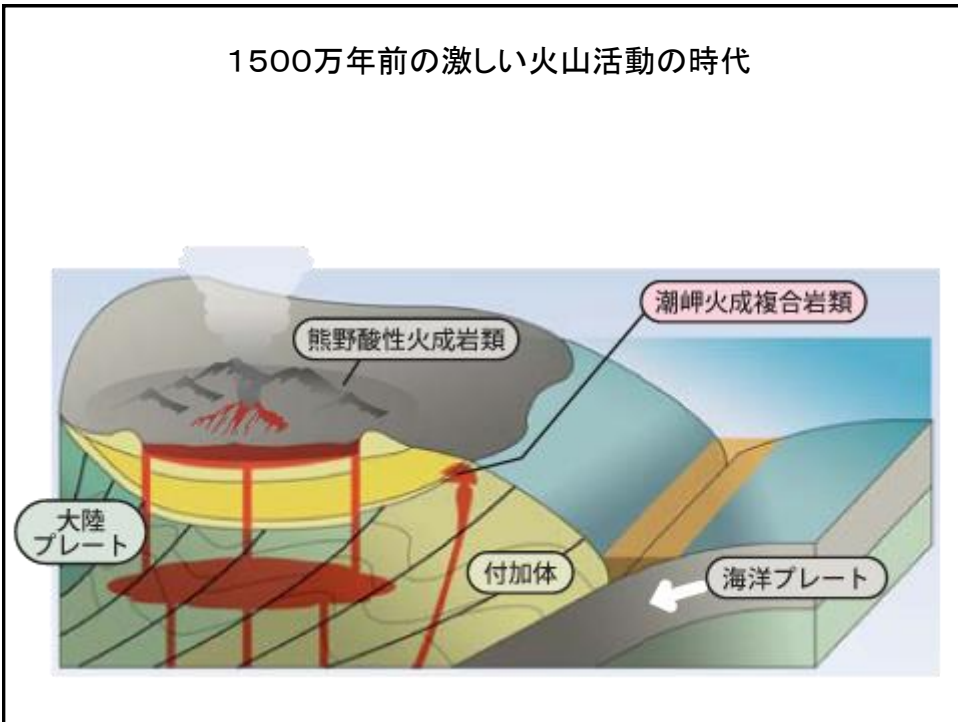
- 1500万年前の熊野カルデラの火山活動
- 海洋プレートの摩擦によりマグマができ、海底火山の噴火
- 紀伊半島が絶えず隆起して、多くの峡谷や滝などの景観を造る。
- 火砕流が噴出してできた花崗班岩の景観。日本の地質百選の「古座川弧状岩脈」「玉置山」などが代表的。
- 信仰や観光の対象となる
古座一枚岩、串本橋杭岩、鬼ヶ城、瀬峡、大台ヶ原、古道石畳
楯ヶ崎、大丹倉、花の窟、那智の滝、神倉ゴトビキ岩、玉置山玉石社、神内神社、古座高池虫食い岩、古座清書島、新宮御船島など
- 熊野の産業を支える地下資源【紀州鉱山など金銀銅などの鉱物、勝浦・湯の峰・湯川・龍神温泉など、紀州御影石、那智黒石、宇津木石など】



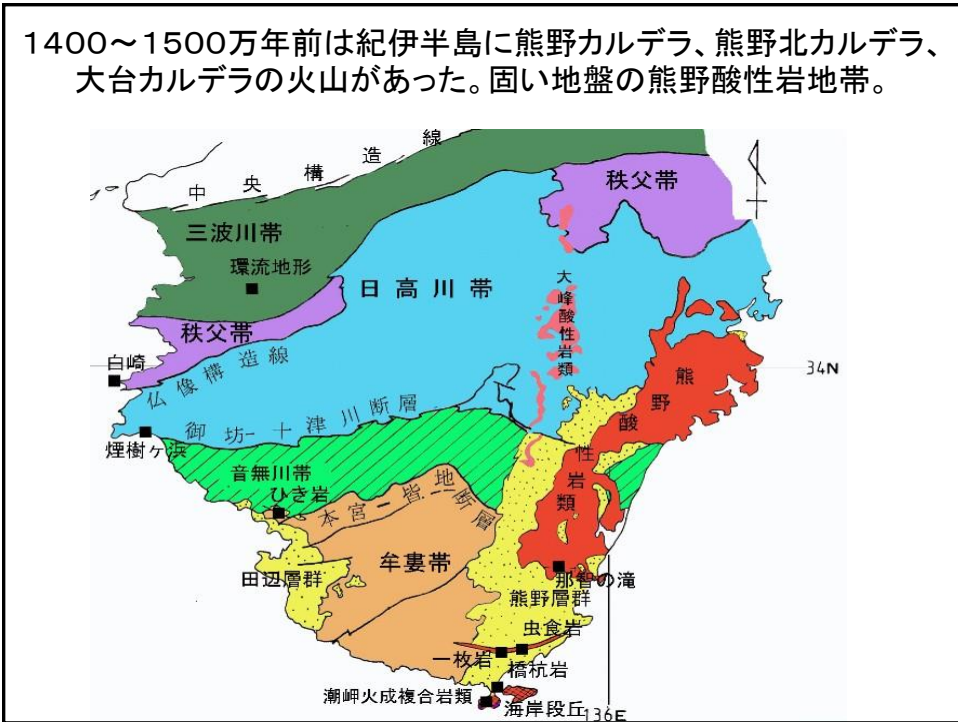
平成31年4月20日、27日放送のNHKブラタモリ



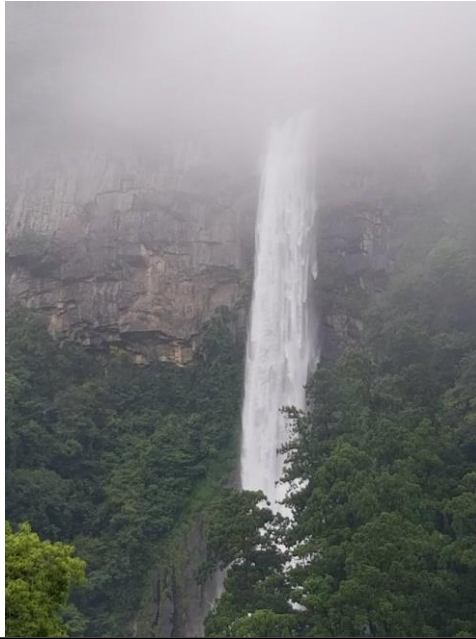
1500万年前の激しい火山活動の時代



1400～1500万年前は紀伊半島に熊野カルデラ、熊野北カルデラ、大台カルデラの火山があった。固い地盤の熊野酸性岩地帯。



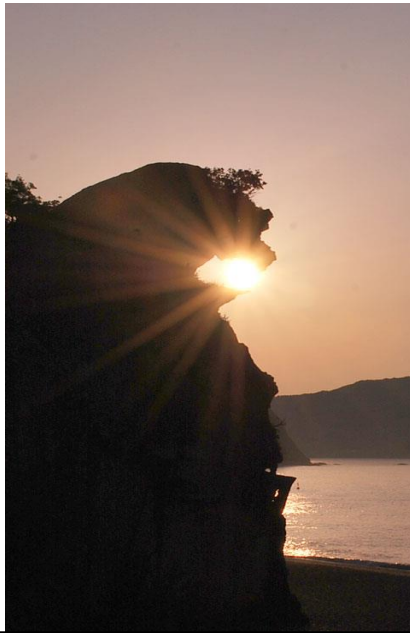
1500万年前の火山活動でできた那智の滝。神武天皇が那智の滝を
発見して上陸したという伝承がある。



東洋のスクフィンクスといわれる獅子岩。江戸時代の名所図会では阿
の岩と呼ばれた。神仙堂は畔の岩で、二つの大岩は大馬神社の狛犬。
国道と市街地開発で尻尾が切られてしまった。



獅子岩は6月頃に朝日を喰える



獅子岩は一年に一度満月を喰える



2011. 12. 10 Photo by Yoshiko

3 イザナミの葬送の地は熊野か比婆山か？

- 古代のほうがグローバルな見方をしていた
- 南方系の神話が基層にあり北方系の天皇を中心とした神話が混ぜ合わさった
- 朝廷は北方系の出雲と南方系の熊野、日向の両方を必要とした。
- 古事記では出雲神話を中心だが、日本書紀では語られない。
- 比婆山信仰圏は備後、出雲、伯耆にまたがる広域なエリア。
- 出雲地方と熊野地方の地名の類似性がある

【日本書紀に見る熊野の祭りと信仰】

三重県熊野市には日本書紀に因む古代の祭りが二つある

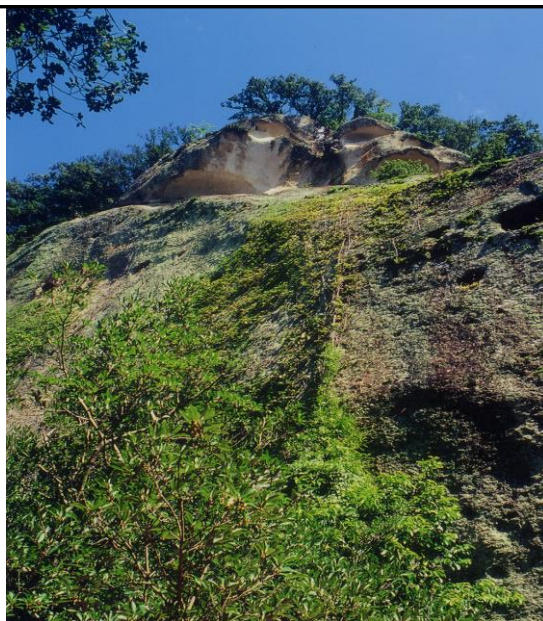
①日本書紀の神生みの舞台・花の窟神社の祭りとお綱かけ神事

②神武天皇東征伝承と二木島船漕ぎ祭り

- 兄弟の稲飯命は海に分け入って鋤持神に、三毛入野命は常世の国に行った
- 二木島船漕ぎ祭りの関船と松阪宝塚船形埴輪の類似性

①花の窟神社のお綱かけ神事

- 2月と10月の2日、年2回祭礼が執り行われる
- ひたすらイザナミの魂を鎮めるための祭り
- 180メートルの7本の縄を纏めて1本の大綱とする
- 「ダイハナ(大般若)」とよばれる海の中に沈む花の窟に向ってお綱を引く
- 日本書紀の記述どおりの祭礼が行われる
- ただし、お綱かけ神事は日本書紀の記述にない
- 農耕が盛んになった頃の豊作の予祝行事(2月)と新嘗祭(10月)の意味があると思われる。



世界遺産・花の窟は日本書紀の神生みの舞台
イザナミノミコトが火の神・カグツチを産んで亡くなった。イザナミの御霊を鎮める神社。
イザナミは自分を犠牲にすることで、火の神を産んだ。火は新たな文明を創造した。



世界遺産 七里御浜

熊野灘に面する七里御浜海岸には黒潮によって運ばれる数多くの漂着の歴史や伝説が残されている。熊野川により運ばれた紀伊半島のすべての岩石が流れ寄る浜辺。七里御浜海岸に打ち上げられたペットボトルや漁具はフィリピン、台湾、中国、インドネシアなどのものが多い。マレビト伝承が多く残る。

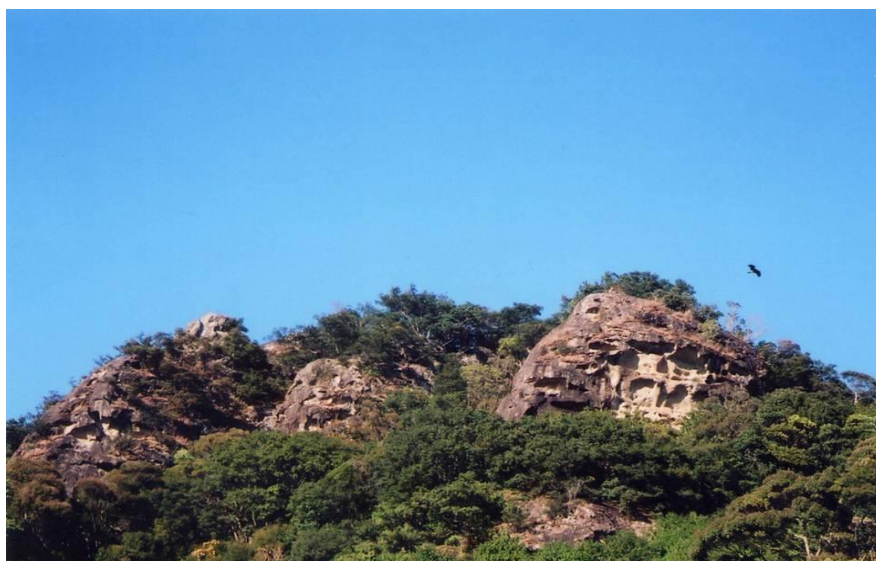
花の窟神社のご神体。女神・イザナミノミコトを祀る。
洞窟は黄泉の国への入り口とされる。



花の窟境内の王子の窟には火の神・カグツチノミコトを祀るイザナミは最初にヒルコの神を産んだ。ヒルコが生まれたのは女神イザナミから男神イザナギに声をかけた「女人先言」に原因があるといわれる。しかし本当の原因はイザナギとイザナミの兄妹婚の近親相姦にあるといわれる。十束剣でカグツチはイザナギに斬られてしまう。



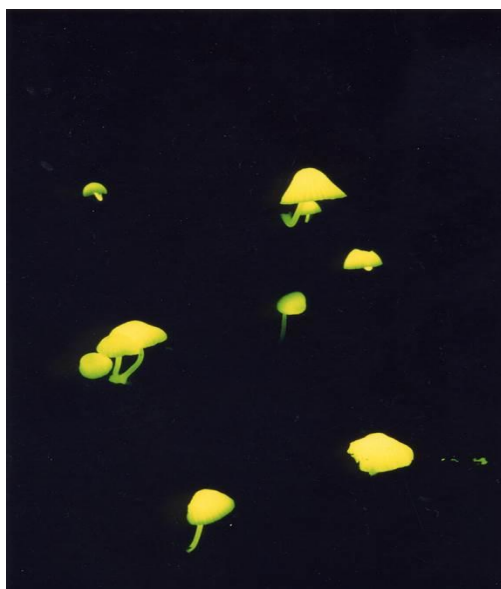
修験者が籠もった灯籠ヶ峰。平安期の歌僧・増基法師の「いほぬし」でもここから海の花の窟に向かって大般若経を唱えたとされる。1500万年前の熊野カルデラによってできた岩倉。



本州で最初に発見された花の窟の光るキノコ(シイトモシビダケ)。シイノキの倒木に着生する。



昼間は白いが、夜になると黄色く発光して幻想的。





「イザナミノミコト火の神を産むときに、灼かれて神去りましぬ。故、紀伊国の熊野の有馬村に葬りまつる。土人、この魂を祭るには、花の時には亦花を持って祀る。(日本書紀卷第一神代上)」
秋には鶏頭、菊など、春にはスイセン、椿など季節の花を供えて神の魂を弔う

お綱かけ神事に使う七つ道具。縄・ロープ・分銅・餅(小俵)・塩・米などをもって7人の上り子をご神体の頂上にある磐座に登る。



自然神を現す7人の上り子が御祓いを受けて、お綱かけ神事の七つ
道具を携えて、ご神体の磐座頂上に登る。



ご神体の巨岩の頂上

自然神をあらわす七人の上り子が50メートルの高さからロープを下ろして、
お綱に結わえ、引っ張りあげる。お綱はウバメガシの大木に結ぶ。



菊・鶏頭・椿・水仙など季節の花を飾ったお綱が頂上に引き上げられる。祭りは2月2日と10月2日の年回執り行われる。お綱はイザナミと現世の人々を繋ぐもの。お綱かけの記述が見られるのは『熊野考異』『日本書紀藻塩草』『日本書紀通證』『紀伊統風土記』など18世紀になってから。



三重県無形文化財・お綱掛け神事に参加する参拝者
七本の縄を束ねたお綱が地面に触れないように境内から国道、海岸まで
順々に送る

お綱を海岸波打ち際まで引っ張る。沖1キロの所には海の花の窟が眠る。



国道を渡りお綱を鳥居横の柱に縛り、神事が終了する。



180メートルのお綱はご神体の巨岩の頂上から張られる。頂上では軍配を振ってお綱が無事、境内の途中にある塔に掛けられて神事が終わる。花の窟は地母神信仰の原点。



お綱掛け神事のあと三貴神であるアマテラス・ツキヨミ・スサノオを現す三流れの幡旗の先には季節の花を飾る。熊野では女神イザナミが主役。伊勢神宮でも女神アマテラスが主役。





「又、鼓・吹・幡・旗を用て、歌い舞いて祭る。」
境内では日本書紀に則り、乙女の舞い、浦安の舞いを踊り、イザナミに奉納する。

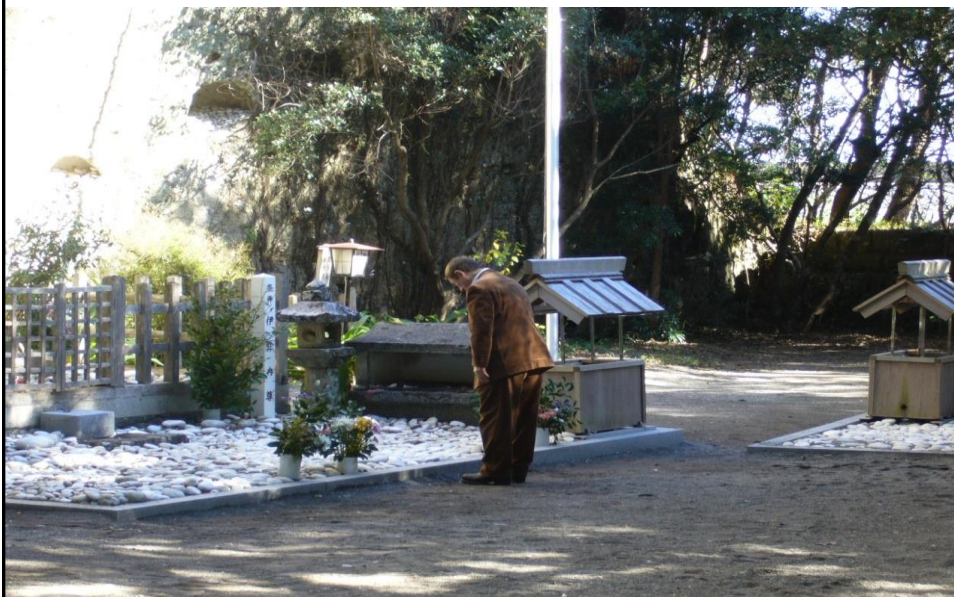
花の窟神社境内の丸石。熊野は甲斐の国と並んで丸石信仰、玉石信仰の地。玉石には霊力が宿ると信仰されている。



花の窟のご神体に触れる参拝者。ご神体が目の前に見え触れることができるのは熊野ならではの。磐座は神が降臨し、ゆるぎない存在感。



花の窟を参拝するビートたけし。日本テレビ「教科書に載らない日本の歴史」の撮影時に参拝した。神様や神社をゴルフ場に例えると熊野は「セントアンドリュース」、伊勢は「オーガスタ」と表現した。



【イザナミ葬送の地・比婆山】



熊野神社の祭神はイザナミノミコト。本殿は別名・熊野権現と呼ばれた。幣殿にはイザナギノミコト、アマテラスオオミカミ、オオクニノヌシノミコト、スサノオノミコト、ククリヒメを祀っている。和銅6年(713)までには比婆大神社と称し、天平元年(729)に社殿が建てられた。



二ノ宮前の高さ5メートルの巨岩は「神籬磐境」とよばれ社殿造営以前はこの場所で祭祀が行われたという。比婆大神が降り立つ依り代。



比婆山山麓の千引き岩。比婆山は神籠石（こうごいし）など多くの磐座が点在する。



山頂の徳富蘇峰筆の「神聖之宿処」の。碑の周りには神々の依り代となる神木のイチイの木が群生している。熊野本宮大社の熊野権現3本のもイチイの木に降り立ち熊野三所権現となり鎮座した。



比婆山山頂(標高1264m)の奥津磐座の御陵石。巨石を取り囲むように7本の榎の古木が立っている。比婆山を源流として斐伊川、日野川、江の川、高梁川がながれる。分水嶺として水分の役割を持つ。



比婆山山頂の比婆山伝説地の案内板。比婆山山系からは東城川が
高梁川となり瀬戸内海へ、また斐伊川、江の川、日野川の源流域とな
り日本海へ注いでいる。中国山地の分水嶺的な山。



比婆山を案内してくれた比婆山伝説ガイド「ツイハラの会」の皆さんに
説明を聞く。



庄原市佐田峠の四隅突出型墳丘墓の発掘現場。備後から出雲の山陰地方にかけては、同型の古墳が見られる。同じ古墳文化圏。製鉄の鉄穴流しによる砂鉄生産のエリアも同じ。



島根県安来市伯太町の比婆山久米神社入口には比婆山略記の案内板が建つ。「出雲と伯耆の国境に葬られた」というイザナミの葬地とされる。土地の縁起では文永3年(1266)紀伊国熊野神を勧請とされるが謎である。



島根県安来市伯太町の比婆山久米神社里宮・標高300メートルの山頂に奥宮がある。



比婆山のロマンを探求する会の花田会長から説明を受ける



イザナミの陵墓とされる松江市の岩坂陵墓参考地



加賀の潜戸で生誕したサダノオオカミを主祭神とする佐陀神社。庄原の比婆山のイザナミの陵墓を遷し祀った社とされている。出雲大社、日御碕神社とともに出雲三大大社とされる。



三笠山麓のイザナミを祀る母儀人基社(はぎのひと
もとしゃ)



イザナミ葬送地の一つ。鳥取県南部町の母塚山(はつかさん)
比婆山信仰圏の比婆山⇒久米神社⇒母塚山は製鉄と水のルート。



母塚山から赤猪岩神社方面を眺める



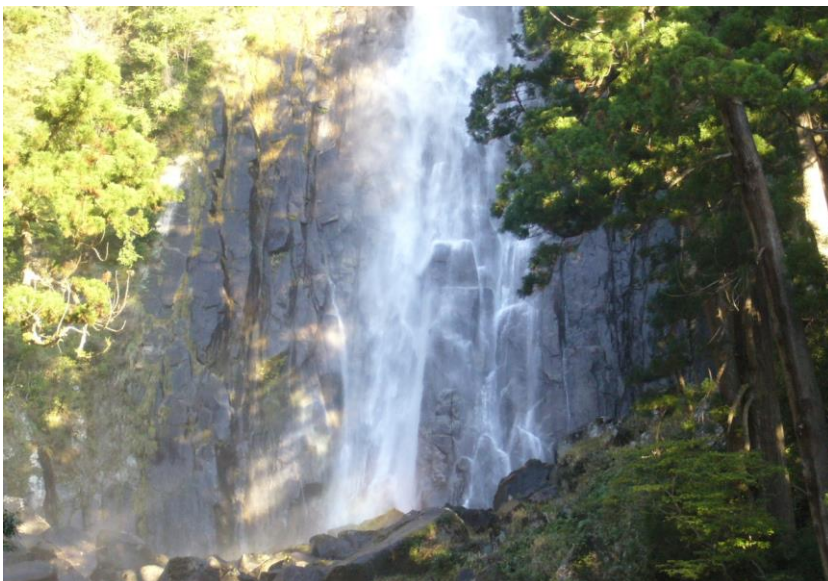
オオナムチを祀る赤猪岩神社。ヤガミヒメを結ばれたオオナムチは兄弟の八十神に嫉妬されて迫害にあう。オオナムチはスセリビメ、ヤガミヒメ、カムヤタテヒメ、トリヒメなど多くの妻を持った。



赤い猪とだまして真っ赤に燃えた大岩を落とされ、それを受け止めたオオナムジは押しつぶされ焼け死んだ。母神は高天原の神に懇願し、我が子を助けて生き返らせた。その後は安全な紀伊の国に逃れさせた。



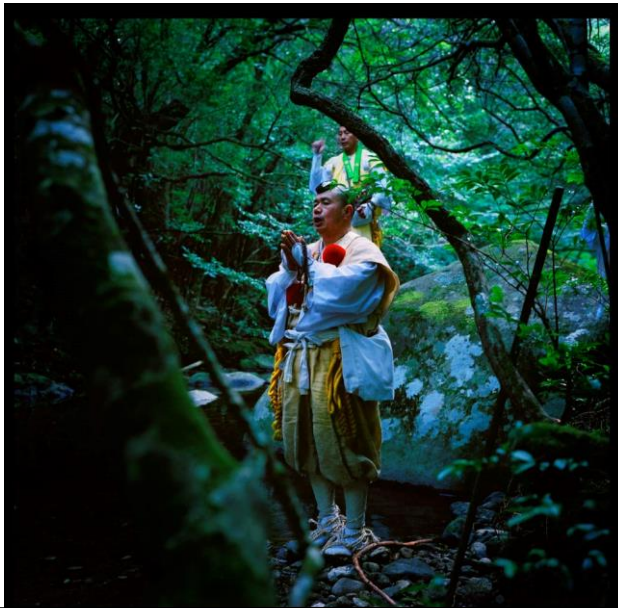
落差133メートルの那智の大滝。インドから那智の浜に漂着した裸形上人が那智の瀧にお堂を作った。熊野信仰の原点。飛龍権現は大穴牟遲(オオナムチ)を祭神とする。オオナムチは製鉄氏族の神。苦難に遭った際に木の国に逃れた。



前鬼・後鬼を従える修験道の開祖とされる役小角（役行者）。
吉野熊野修験は全国各地の山岳宗教に影響を与えた。



日本古来の修験道は森や岩や滝など自然を修験と籠りの場とした。当初は原始信仰、庶民信仰であったが、仏教、道教の思想などが加わる



大峰修験の道。吉野から熊野までの峻険な山岳地帯を修験者が踏破



役行者の弟子である赤鬼の前鬼と青鬼の後鬼は前鬼山に住んだ。



前鬼・後鬼の子供は五鬼坊と呼ばれ、五鬼継(行者坊)、五鬼熊(森本坊)、五鬼上(中の坊)、五鬼助(小仲坊)、五鬼童(不動坊)の五家の祖となった。写真は1300年の家系がある61代目五鬼助当主、五鬼助義之さん。



五鬼助義之さんの宿坊・小仲坊。大峰奥駆修験者の唯一の宿坊。
一般の方でも宿泊できる(土日のみ)



スサノオを祀る熊野大社。かつてはイザナギの子で食物を司る「櫛御氣野命」を祀っていたが、スサノオの別神名とする信仰が生まれ現在に至る。出雲国風土記では「熊野大神の社座す」とある。



熊野大社・熊野宮司が火をおこす鑽火祭(10/15)の亀太夫神事は熊野大社が出雲大社より優位にあることを示すもの。



熊野大社を流れる意宇川の上流の熊野山(熊成山)に上社があり紀州の神々が祀られている。熊野大社は下社にあたる。



熊野大社上社の速玉神社跡。熊野山(熊成峯)には元宮があり、中世以降紀州の熊野信仰の影響を受けて熊野権現を祀り、下の宮には伊勢宮として二社祭祀の形態が見られた。比婆山とも言われている。



4、出雲と熊野の黄泉比良坂



「黄泉比良坂伝説地」石碑。昭和15年佐藤造機(現三菱農機)の創業者・佐藤忠次郎が建立した。



出雲・黄泉比良坂(平坂)の千引きの磐座。イザナミはヨモツヘグイ(黄泉戸喫)をしたので戻れないとイザナギに言った。イザナギの姿を見てしまい、イザナギとイザナミの壮絶なバトルが繰り広げられる。



黄泉比良坂入口。イザナギが鬼の追ってに対して、十拳の剣を振りながら、蔓草や櫛、桃などの呪術的なものを投げて追い払っている。黄泉比良坂を無事通り抜けたイザナギは入口を大石で塞いだ。



伊賦夜坂黄泉の国と葦原の中つ国を結ぶ黄泉比良坂のモデルとなったのが古墳の横穴式石室と言われる。



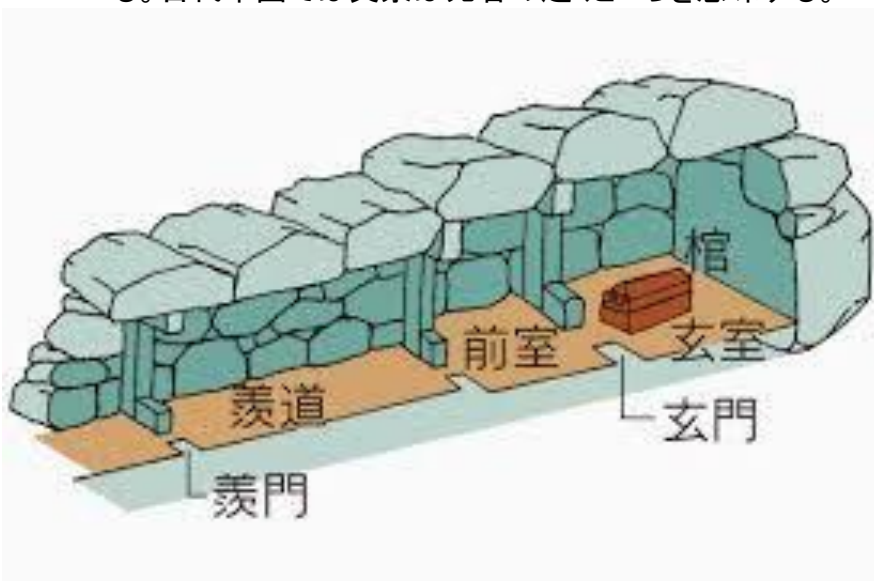
黄泉の国への入り口とされる猪目洞窟。出雲大社の裏山の海岸部。弥生時代から古墳時代にかけての遺跡も発掘されている。



岡山県赤磐市の両宮山古墳。吉備にはイザナギ、イザナミの国生み神話や吉備津彦が鬼の温羅を退治するという伝説が残る。大和と肩を並べる大勢力があった。温羅伝説は桃太郎伝説のモチーフ。鬼ノ城。



遺体を安置する石室と外部が羨道というトンネル状の通路で繋がっている。玄室が黄泉の国で羨道が黄泉比良坂を表しているといわれている。古代中国では黄泉は死者の赴くところを意味する。



横穴式石室



有馬町日初の千引の磐座。イザナギと黄泉の国に入ったイザナミは
壮絶な戦いを繰り広げるが、イザナミが遣わした鬼をイザナギは桃を
ぶつけて退散させた。桃で鬼を退ける始まり。



熊野市有馬町日初にあるイザナミノミコトを祀った石碑。
千引の磐座の近くにある。



イザナミノミコトが火の神カグツチを産んだとされる産田神社
の古代祭祀遺跡のひもろぎ(神籬)。古代には神の依り代の
磐座の前に神を迎えるための神籬を用意した。



まないた様(天の真名井戸)。婦人病にご利益があるといわれ篤い信仰を集める。産田神社から裏行場である。滝も流れ、水神が祀られる。古代の禊の場。黄泉の国から戻ったイザナギの禊の場はこのような所



5、日の出る熊野と日沈みの出雲 建国神話の熊野と国譲りの出雲

- 神武東征の建国神話の舞台は日の出る熊野。オオクニヌシの国譲り神話の舞台は日の沈む出雲。
- 古事記、日本書紀では陰陽の二つの地域が必要だった。
- 日本書紀では苦難の末に天皇の地位に着いた正当性を、古事記では出雲王国を力の末に国譲りをさせたことが書かれる。
- 一方では、巨大な神殿を建てたことにより、大国主命への哀惜の念も感じられる。
- 2000年に巨大神殿の宇豆柱が出雲大社拝殿と本殿の間から発掘された。

【神武東征】

- 神武東征の物語は神話から歴史へと、神から現人神へと移行する物語でもある。神から天皇へと転換する。神と人間、神話と歴史の境界がはっきりとしない。
- 東征譚はイワレビコが神武天皇になるまでの通過儀礼的な物語。
- 「東に美き地有り。青山四周(よもにめぐ)れり」塩土(潮つ路)老翁
- 航路 日向美々津湊→豊国宇沙(佐)→筑紫岡田の宮(1年滞在)→安芸の多祁理の宮(7年滞在)→吉備国高島宮(8年間滞在)→二木島→速吸門(国津神に海路案内)→浪速渡→白肩津(ナガスネビコの攻撃)→血沼海→男之水門→竈山(五瀬命を葬る)→紀伊水道→熊野荒坂の津(上陸・兄弟二人がいなくなる)→吉野→宇陀(エウカシとオトウカシとの闘い)→忍坂(土蜘蛛との闘い)→白檣原宮
- 記紀では熊野に至るまでの年月と熊野から檣原に至るルートが違う
- 各地の豪族や神々を従わせ稲作を広めるための東征であった。
- 五瀬命「日の神の御子が、日に向かって戦うのは良くなかった。だからナガスネビコごときに痛手を受けた。今から進路を変え、背を日に受けて戦おう」

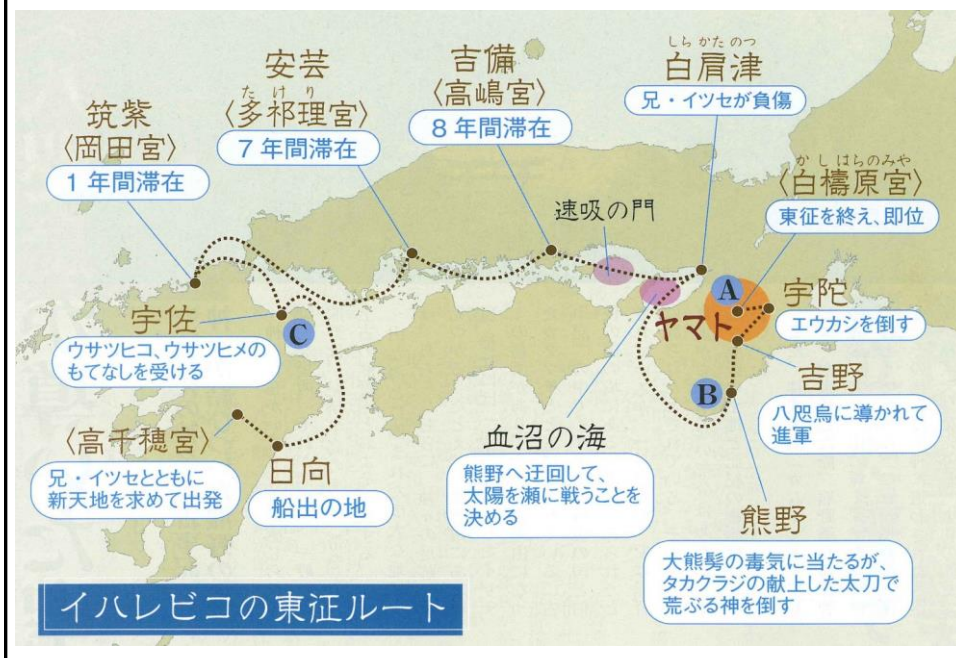
神武天皇東征伝承と二木島船漕ぎ祭り

- 日本書紀・卷三日本磐余彦天皇(神武天皇)

「軍は名草邑に着き、すぐさま名草戸畔を殺した。とうとう狭野を越えて、熊野の神邑に着き、天の磐楯に登った。そこで軍を率い、だんだんに進んだ。海の中でにわか突風にあい、皇船は漂流した。このとき稲飯命が嘆いて言った。ああ我が祖は天神で、母は海神なのにどうして私を陸で苦しめ、また海で苦しめるのか。といい終わるとすぐ剣を抜き海に入った。...熊野の荒坂の港に到着した。そして丹敷戸畔というものを殺した。」

- 神武天皇東征の際に海に沈んだ稲飯命と三毛入命を助けに行った故事を再現した祭り
- 関船は二人の命の亡骸を乗せた葬送の船
- 三重県松阪市で発掘された松阪宝塚古墳船形埴輪の天蓋や儀仗など飾り付けの形態と類似

「古事記・神話を旅する(洋泉社MOOK)」より



五瀬命を祀る和歌山市竈山(かまやま)神社。白肩の津で五瀬命はナガスネビコの弓矢に当たり、死ぬ前に太陽に向かって進軍したからいけなかった、太陽を背にして上陸しなければならないといった。和歌山市には阿蘇山の凝灰岩を使った前方後円墳の大谷古墳がある。



神倉山・ゴトビキ磐。ゴトビキ磐。熊野権現御垂迹神倉山縁起では神倉に熊野権現が降り立ったといわれる。その後熊野権現は速玉、本宮に鎮座する。2月6日は鎌倉期の538段の石段を松明を持って走り下る火祭りが行われる。



神倉神社経筒埋蔵地。弥生式の銅鐸破片などが出土する古代祭祀岩陰遺跡。



鎌倉期の538段の急な石段を登る



2000人以上の松明を持った上り子が538段の階段を一気に駆け下りる火祭り。毎年2月6日に行われる。那智にも火祭りがあるが、熊野は火の神カグツチが祀られている場所でもある。





新宮速玉大社は神倉山が元宮。神倉山に対して新しい宮が速玉大社。



熊野速玉大社御船祭り。ご神幸船で海から神様を迎える。



日本書紀の荒坂の津である神武天皇上陸の地とされる熊野市二木島町楯ヶ崎。古事記では新宮熊野村とされる。熊野地方には神武東征譚が多く残る。



黒潮洗う楯ヶ崎には日本で有数の高さを誇る柱状節理の大岸壁が聳える神武天皇東征の際・上陸したといわれる天の岩楯・熊野市楯ヶ崎の柱状節理の大岩壁。吉野熊野国立公園の特別保護地域



日本書紀の神武天皇東征に因む二木島船漕ぎまつり
2艘の関舟が神武天皇の兄弟であるワダツミの神の稲飯命、常世の郷に行った三毛入野命を助けに行くさまを再現する。稲飯命は室古神社に、三毛入野命は阿古師神社に祀られる。

八丁艘の関船。一つの艘を3人がかりで漕ぐ船漕ぎ競争。稲飯命と三毛入命を助けに行く様子を再現。古代の高速船である熊野諸手船。



天蓋や儀仗など船の飾り付けの形態は三重県松阪市の宝塚古墳から発掘された船形埴輪に似る。古代の葬送の船。



松阪宝塚古墳船形埴輪。二木島の関船の形態と同じ。天理市東殿塚古墳の埴輪には、この船にそっくりな線刻画が描かれている。



阿古師神社の鎮座する熊野楯ヶ崎。古代は志摩と伊勢の国境。神武天皇上陸の地といわれ、柱状節理の巨大な岸壁が聳える。ここでは神武東征にちなむ祭りが二木島湾でくり広げられた。荒坂と呼ばれる。

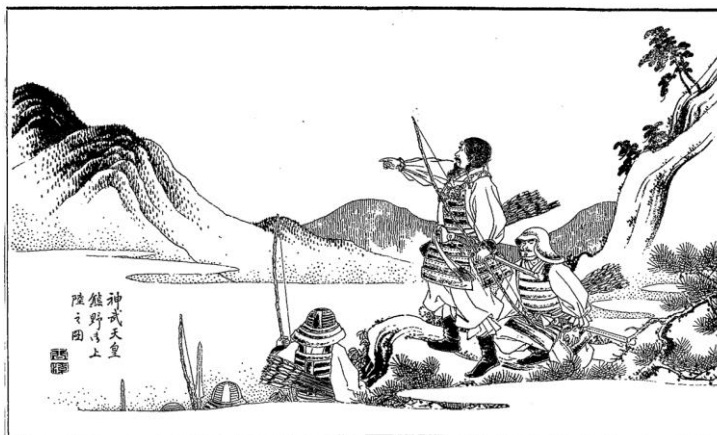


高千穂神社の後藤俊彦宮司は2014年2月に高千穂神社の御祭神であるミケヌノミコを祀る熊野楯ヶ崎・阿古師神社に参拝し、高千穂神社の宮司として初めて祝詞をあげられた。



神武天皇熊野上陸の図(紀伊国名所図会)

丹敷戸畔を征服し、土着の荒ぶる神の化身である大熊の毒気にあてられ気絶したが、熊野高倉下のフツノミタマの剣に救われた。熊野における最初の試練を与えられた。その後、八咫烏の導きを得て、大和(宇陀、吉野)に入り、橿原宮に即位。



熊野牛宝印(符)。本宮、速玉、那智大社ではカラス文字でそれぞれ書かれている。歴史上、誓約の場で使われた。神武天皇を導いた三本足の大鳥は賀茂建角身命ともいわれる。



那智浜の宮境内にある神武天皇頓宮跡。浜の宮では勝者の神武と敗者の丹敷戸畔の両方を祀る。



浜の宮では神武天皇と女性豪族(軍団)の丹敷戸畔を祀る。宮崎県西都原古墳では女性の埋葬品からも武具が出ている。日本書紀では女坂には女の軍団を配置すると書かれている。



紀州熊野でも火祭りが多い。毎年7月14日の扇祭りでの那智の火祭り。1本50~60キロの松明を持って飛龍権現に向かう。浄めの火。





日沈みの出雲

- 古代から出雲は日の沈む聖地とされてきた。
- 夕陽を神聖視して畏敬の念を抱いた。
- 「日沈宮」の日御碕神社。「天日隅宮」の出雲大社と呼ばれる。
- 日御碕神社社伝では「伊勢大神は火の本の昼の守り、出雲の日御碕の清江の浜に日沈宮を建て、日の本の夜を守らん」とある。日が沈む海の彼方に繋がる異界の地。

稲佐の浜に日が沈むころ。日が沈む聖地・出雲の象徴が稲佐の浜と「日沈宮」の日御碕神社。古代から夕陽を神聖視して、畏敬の念を抱いた。出雲大社は「天日隅宮」と呼ばれる。



屏風岩は高天原の使者タケミカズチとオオクニヌシが国譲りの談判をした場所。



朱塗りの楼門をくぐると鮮やかな社群が見えてくる。社伝では「伊勢大神は火の本の昼の守り、出雲の日御碕の清江の浜に日沈宮を建て、日の本の夜を守らん」とある。日が沈む海の彼方に繋がる異界の地。日本遺産「日沈みの宮」。



スサノオと天照大神を祀る日御碕神社。楼門をくぐった正面が天照大神を祀る「日沈み宮」といわれる下の宮。出雲国風土記では「美佐伎社」と記載される。8月7日の夕刻「夕日の祭り」が催行される。



「幸魂奇魂(さきみたまくしみたま)」のシーンを表した像。スセリヒメ、ヤガミヒメ、カムヤタテヒメ、トリヒメなど多くの妻を持った恋多き神であるがゆえに縁結びの神となった。また幽界の世界を司るオオクニヌシは未来の出会いや縁結びを決める神となる。



出雲大社拝殿。日本書紀では国譲りの代わりに巨大な神殿が建てられたことになっている。古事記ではこれ以前に巨大な神殿が建てられている記述がある。注連縄の重さは1・5トン。



大社造りの本殿の高さは24メートルあり、神社本殿では最も高い。1744年に造営された。国宝。国譲りのときにオオクニヌシが「私の住処を高天原の神々のように壮大なものにしてください」と言い「天日隅宮」として造営された。現在は84代「出雲国造」が祭祀を行う。



出雲大社宝物館展示の「雲太」。平安時代の『口遊(きちずさみ)』に「雲太、和二、京三」とあり、出雲大社が一番、二番目が東大寺大仏殿、三番目が平安京大仏殿。高さ48メートルの神殿だったと言われる。2000年に「金輪御造営差図」通りの巨大な宇豆柱が発見された。



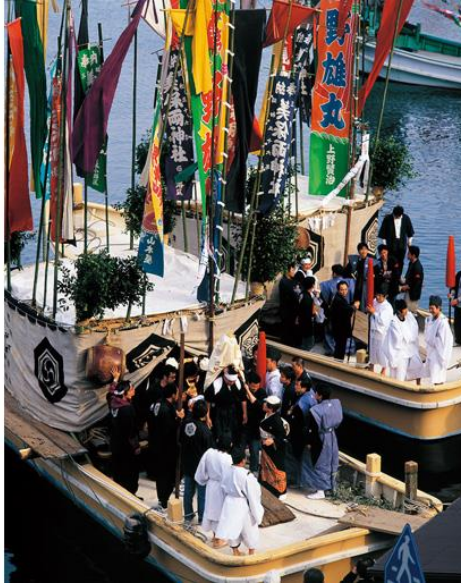
高さ48m、階段の長さは109mの高層神殿だった。大国主命の子・タケミナカタを祀る諏訪大社の御柱行事を彷彿とさせる。



拝殿は船庫を模した造りで、壁が無く梁がむき出し。優れた音響効果がある。本殿は「美保造り」「比翼大社造り」と呼ばれ向かって右に大国主命の後で高天原から稲穂を持って稲作を広めた三穗津姫命を祀り、左には漁業の神様のコシロヌシを祀る。



4月7日に行われる青柴垣神事も国譲りに因む神事。国譲りの時に釣りをしていたコトシロヌシが父のオオクニヌシから国譲りを問われ国譲りの奉獻を決断した後に海中に青柴垣を作り籠ったとされる。



毎年12月3日に行われる美保関諸手船神事。コトシロヌシが父親の大国主命から国譲りの相談を受ける様を儀礼化したもの。



6 国引き神話に見る出雲の日本海文化交流圏と熊野のイザナミ神話に見る黒潮太平洋文化圏

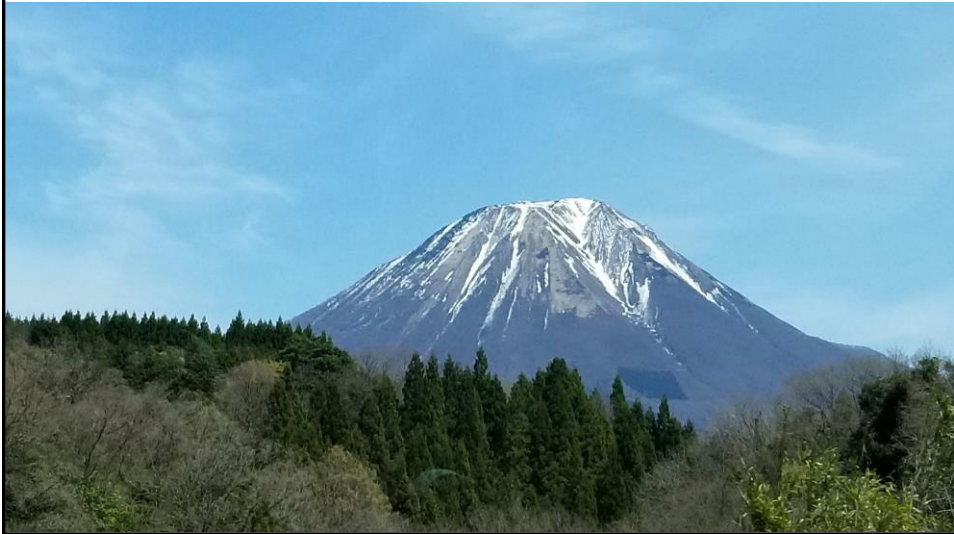
- 出雲を仲介して糸魚川のヒスイ(翡翠)や勾玉が中国や朝鮮半島との交易が成されていた。日本海を舞台に大きな交易圏を現すのが「国引き神話」であろう。
- オオナムチノミコトが越(高志)の国のヌナカハヒメを妻に娶ろうとしたのは出雲と越の国との関係を示しているものである。
- 『日本書紀一書第四』には「天から追放されたスサノオは、新羅の曾戸茂梨(そしもり)に降り、この地吾居ること欲さず、息子の五十猛(いそたける)と共に土船で東に渡り出雲国斐伊川上の鳥上の峰へ到った後、八岐大蛇を退治した」とある。これは何を意味するのか？ 朝鮮半島から鉄の技術を持ってきたのがスサノオと捉えるのか。産鉄民の渡来を意味するのか？

出雲国風土記(733年編纂)にみる日本海交流文化圏

- 風土記はその地方の地名の由来、山川原野の名前、特産物、伝承などが書かれる。現存は出雲国、常陸国、播磨国、豊後国、肥前国の5つの風土記がある。
- 古事記・日本書紀に記されていない地方の情報が沢山ある。
- 出雲国風土記にだけ記される、出雲の国の成立を物語る神話が「くにびき神話」
- 島根半島が日本海に突き出し、宍道湖と中海を取り込む独特な地形に加え、大山と三瓶山が両端に聳える。
- ヤツカミズオミツノミコト(八東水臣津野命)が「出雲の国は細長くてまだこれからの国だ。どこからか国を引いて来て縫い付けなければならない」と考えた
- 三瓶山(佐比売山)を杭に見立て、菌の長浜を綱に見立てて「国来。国来」と言って新羅の国から土地を切り離し、杵築の岬を縫い付けた。
- 大山を杭に見立て弓ヶ浜を綱に見立て越の国(北陸)から土地を引き寄せ、三穂の岬(美保関)を縫い付けた。
- 国引きを終えたヤツカミズオミツノミコトは意宇の柱に杖を突きたてて「おう(おえ)」と言った。
- 長浜神社はヤツカミズオミツノミコトを祭神として祀る。
- くにびき神話は出雲が大きな交易路だった日本海を通じて外の世界と繋がっていたことを表す物語。



弓ヶ浜を綱に見立て、大山(標高1729m)を杭に見立てた



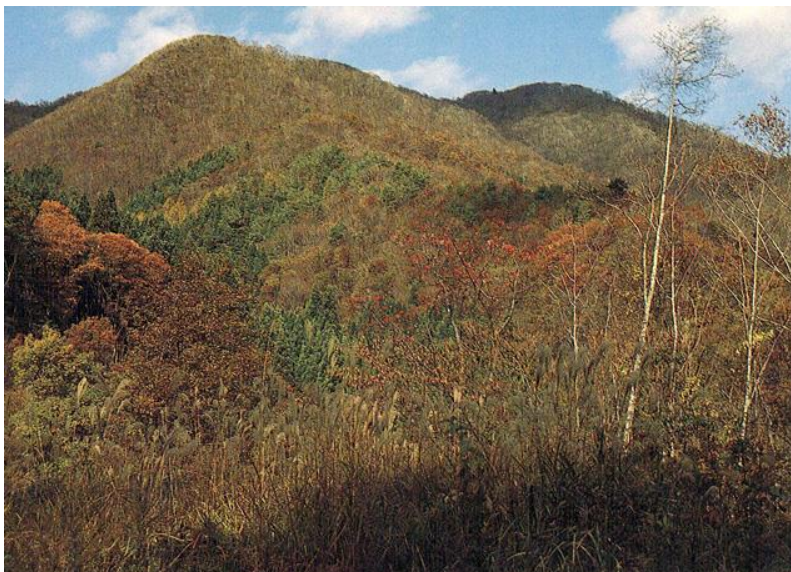
出雲玉造跡出土地



越の国・糸魚川の翡翠で造られた勾玉。出雲大社命主社遺跡から糸魚川の翡翠を加工した勾玉や銅戈などが見つかった。日本の宝



ヤマタノオロチが棲んでいたという伝承の地・船通山(1142m)。鳥上山、鳥髪山ともいう。ヤマタノオロチの尾から出た霊剣「天叢雲剣出顕の地」の記念碑がある。天叢雲剣は後に草薙太刀に。



スサノオは十束の剣でヤマタノオロチを退治した。大蛇の尾からは霊剣天叢雲剣(草薙太刀)が出てくる。(浮世絵師・月岡芳年画)



全長153キロの斐伊川。船通山を源流として出雲平野を流れて宍道湖から中海、日本海へと注ぐ。蛇のようにくねって古代からたびたび氾濫をおこし農地を飲み込み農民を苦しめた。斐伊川とその支流こそがヤマタノオロチだと言われ治水が神話の元となった。



菅谷たたら高殿。1751年松江藩の鉄師・田部家の一大生産拠点として作られた。松江藩は藩内の有力鉄師9人にだけたたら株を与えた。



金屋子神社参道脇には寄進された鉤が並ぶ。



神庭荒神谷遺跡。銅剣358本。1984年に銅鐸6個、銅矛16が発掘され日本の歴史を覆した。出雲型とよばれる中細型。



インドネシア・バリ島ヒンズー教の花祭、ガルンガン祭



各家庭の玄関先には日本の七夕の竹飾りにも似たペンジョールが立てられる。、祖先霊や神々は、このペンジョールを目印に各家庭に降り立つと言われている。



ペンジョールは、龍を模した物とも、聖なる山アゲン山を模した物とも言われ、ペンジョールが立ち並ぶ姿は、神々のすむ島・バリ島らしい風景とも言える。ペンジョールはこの後35日間は立てたままにしておく。



熊野のイタダキ風俗の頭上運搬がバリ島でも見られる。



バリ島では殺された神の死体から作物が生まれたとするものであるハイヌエレ神話がある。日本神話のオオゲツヒメやウケノミタマ(保食神)の食物神にもハイヌエレ型の説話が見られる。

